日中
おかやま
題字故原田親
No. 996
2023/5/1
日中友好新聞

中国帰国者問題写真展

真田紀子

4月18日に標記の会へ当番として一日、市役所1階ロビーにつめていました。

当日10時ごろに市役所に行くと、すでに貝吹さん、三宅さん、小林愛子さん、曽田ご夫妻と来られていました。そのうえ、知らないご婦人が3人熱心に展示を見ています。貝吹さんに聞いてわかりました。芳田公民館の日本語教室の受講生の方々でした。山根さん、守本さん、益田さんでした。

今回は小林軍治さんを中心にした展示でしたので、改めて見てみると、小林さんのご家族がどれだけ大変な状況で、引き揚げてこられたか胸が詰まる思いでした。

特に2005年に、軍治さんのお父さんが、満州の龍爪開拓団を訪問された写真の前で、皆さんと、どうしてお母さんは一度も訪問をされなかったのかということを話し合ったのですが、満州で二人のお子さんを亡くしている母親として、忍びないものがあったのだろうと推察しました。

日本語教室の展示の中に、小林先生への感謝の言葉を、受講生の皆さんが書いてくれたものがありました。その展示について、愛子さんが“読んでいると涙が出ました”とおっしゃっておられました。

3時ごろには青木先生が、仕事が終わったのでと駆けつけてこられました。その後山陽新聞の方が取材にこられ、明日の新聞に載せますのでと、細かいことを一つ一つ確認しておられました。

翌日19日(水)の山陽新聞に5段にわたる大きな記事が掲載されました。

満蒙開拓団出身の故小林軍治さん

帰国の残留邦人を支援

岡山 きょうまで市役所市民ホール

遺徳しのび写真展

小林軍治さん

中国文化に親しむ会

中国結びでブレスレットを作る！

4月16日(日)は14時から岡輝公民館で中国結びでブレスレットを作りました。

参加者は8人で、一人一本作って持って帰りました。

中国結びは玉房結びや唐蝶結びという複雑な結び方があります。しかし今回は初心者ばかりなので、平結びを少し応用しただけの簡単な手順で作りました。

さて、結び始めていくと、参加者それぞれの性格が如実に現れました。

すぐに結び方を理解してきれいに編んでいく人、さほど編まないうちにあきらめる人。途中間違えてることに気づいてるのに頑なに直さない人。好き勝手に編んでいく人。間違えたくなくて何度も確認する人。

幸いにもなんとかみんな編み終えることができました。

次回5月21日(日)の14時からは、同じく岡輝公民館で、青木康嘉先生の帰国者問題のお話です。

小川涼子

「故小林軍治と第六次龍爪開拓団」その4

近現代研究者　青木康嘉

8．2007年の龍爪開拓団訪問

筆者の本『大地の叫び』(2011年自主出版、岡山市文化奨励賞受賞）から引用する。

「2007年夏、「岡山県龍爪開拓団跡地を訪ねる旅」を企画するにあたって、中国残留日本人孤児であった高見英夫と日本へ引き揚げることのできた高見エミ子や小林軍治に参加してもらうことが大きな目的であった。しかし、当時高見英夫は八歳、高見エミ子は七歳、小林軍治は三歳であった。はっきり「記憶」している年齢とはいいがたい。（中略）龍爪郷の街は、市が立っていて賑わっていた。人民政府の食堂で昼食をいただいていたら、高見英夫が食事も途中に一足先に出かけた。

四年前山陽新聞社の記者と訪ねた場所へ向かったのだ。龍爪河を渡って、地図上では畜産学校のあった近くである。この場所は、昔の龍爪開拓団を感じさせる古い家がある。そこは、立木の塀があり、中庭にトウモロコシや野菜が雑然と植えられている。右手に馬小屋があって、馬が首をのぞかせていた。戦前日本人が住んでいた家だという。家の奥に小高い丘がある。

（裏面へ続く）

発行所
日本中国友好協会
〒111-0053
東京都台東区浅草橋5-7-5
鈴和ビル5階
電話 03(5830)2140(代)
FAX 03(5829)2141
http://www.jcfa-net.gr.jp
E-mail:nicchu@jcfa-net.gr.jp
振替 00110-1-21176

日中友好協会
岡山支部
〒703-8034
岡山市北区下伊福
西町1-53 民主会館1F
TEL・FAX(086)258-1806

日中友好協会
倉敷支部
〒713-8031
倉敷市福田町浦田2461-45
TEL・FAX(086)455-7800

日中友好協会岡山支部ホームページ
http://rizhongyouhao.iinaa.net/
メールアドレス
nicchuokayama@yahoo.co.jp

高見英夫自身は、「日の出郷」と思いこんでいる。高見は、その家の住人にお土産を持って行っていた。高見英夫の「感情記憶」に残っている自宅のイメージとよほど似かよっているのだろう。（中略）１９８３年、父光雄と軍治は、元住んでいた場所を見つけることができた。家も後から建てられていた物だったし、住んでいる人も知らない人だったが温かく迎えてくれ、一緒に撮った地元女性の写真が、２００５年の訪問の際の場所的な決め手になった。その女性は今回も雑貨屋（食品店）で働いていた。

彼女は、本部跡や軍治の家跡を案内してくれた。高見英夫の家も、日の出郷で、軍治の旧居から道を隔てて数件離れた所にあった。しかし、英夫は「ここは、全く記憶にない」という。それもそのはず、赤い煉瓦の家が建ち並び、舗装工事がすすみ、中国の経済成長はここにも及んでいて、原風景をあとかたなく変えていた。」

9．2012年の龍爪開拓団訪問

２０１２年夏、満蒙開拓青少年義勇軍村上中隊出身の杉山勝巳の足跡を訪ねる旅の際にも龍爪開拓団を訪れた。その時の筆者の本『大地の青春』（２０１２年自主出版）の文で紹介する。

「１９８３（昭和58）年、小林軍治は父とこの地にきた。まだ開拓団の跡を色濃く残していた時代に、当時の記憶がある関係者が訪ね、そして自分が住んでいた家を訪ねた。小林軍治と龍爪開拓団のことは、詳細なことはこの紙面では書かない。拙著『大地の叫び』を読んでほしい。２００５（平成17）年と２００７平成19）年に龍爪開拓団を訪れた時の当時の住民の写真を持って行って、当時の人と再会し、友好を温めた。この時は、龍爪開拓団日の出郷本部近くの日本人住居跡を見せてもらえた。煙突のある屋根にオンドルや釜戸、木製ベッドなど懐かしい龍爪開拓団日の出郷に住んでいた日本人の匂いがする部屋に入った。ここで約2時間滞在した。日の出郷跡を出発した後、林口駅に向かう途中、『浪花』と書いた道路案内があった。龍爪開拓団浪花郷跡を示す地名が現在でも残っていた。」

10．2015年の龍爪開拓団訪問

２０１５年8月24日付同行した高見幸義記者が書いた新聞記事で紹介したい。この時の訪中は、七虎力開拓団『美作郷』跡や佳木斯の陸軍病院跡を訪ねる旅の途中に、龍爪開拓団跡に立ち寄った。この訪問で龍爪開拓団跡の住民と一気に親しくなった。

『七虎力開拓団跡から１００キロほど離れた林口県の竜爪開拓団跡も訪れた。岡山県出身者でつくる日の出郷は、ツアーに参加した小林軍治さん（72）＝岡山市中区江崎＝の生まれ故郷だ。『満州第六次龍爪開拓団の足跡』（船越美智子編著）によると同開拓団の在籍者は１２５４人。終戦当時2歳だった小林さんは、生還者５７５人のうちの1人。今でも『竜爪』と呼ばれる村の訪問は、小林さんにとって１９８３年に父親と来て以来5回目。到着すると多くの住民が集まり、開拓団時代の古い家屋に案内してくれた。所有者の候桂英さんは終戦直後にここで生まれた集落の最長老。昔、日本人がここにいたことしか知らない。もう戦争を起こさずに平和が続いてほしい」と言う。今は日中友好協会岡山支部事務局長を務める小林さんは、『気持ちよく迎えてもらい、里帰りをした気分。お互い重い歴史を背負っているが、何度も交流して理解を深めたい」と顔をほころばせた。」

11．2017年の竜爪開拓団訪問

２０１７年7月30日付同行した高見幸義記者が書いた新聞記事で紹介したい。この時の訪中は、龍爪開拓団やハルビン、長春、瀋陽と逃避行した龍爪開拓団の足跡を訪ねる旅だった。この時の訪問で龍爪開拓団跡の住民と飲食を共にする交流が始まった。

『ロシアと国境を接する黒竜江省。トウモロコシや大豆畑の緑に覆われた大地が一面に広がる。その風景を小林軍治（74）はバスツアーの車窓から眺めていた。車が向かう同省林口県にあった竜爪開拓団で戦時中に生まれた。今でも『竜爪』と呼ばれる開拓団跡への村へは、小林さんにとって6回目の訪問になる。岡山県出身者が農業や牧畜を営んでいた集落『日の出郷』があった場所だ。到着すると、顔見知りの住民がれんが造りの家が並ぶ村を案内してくれた。日本人が住んでいたことから今でも稲作が盛んだが、開拓団時代の家屋は昨年、最後に残った1軒が取り壊されたという。『小さいころは日本人がつくった家屋が並んでいたが、もう戦時中の物は何も残っていません』。地元で雑貨店を営む劉正峰さん（58）が教えてくれた。宿泊先のホテルで初めて開いた交流会には住民9人が来てくれ、一緒に中華料理に舌鼓を打った。農業、王占春さん（48）が、『戦時中は日中両国ともに不幸な時代があったが、中国人も平和を望みます。これからも交流を続けましょう』と話すと、出席者から拍手が起こった。

引き揚げ体験者らが作成した記録『満州第六次龍爪開拓団の足跡』によると、同開拓団の在籍者は１２５４人。終戦直前のソ連侵攻を受け、逃避行と難民生活を余儀なくされた。生還者は半数以下の５７５人にとどまる。当時小林さんの父親は現地召集されて不在。臨月の母親に手を引かれ、ソ連軍の機銃掃射に追われた。山中で生まれたばかりの弟は連れていくことができなかったという。多くの団員が途中で倒れた。敗戦のうわさを聞いて投降したのが9月半ば。連行されたハルビンの収容所で父親と再会でき、九死に一生を得た。

終戦の年の秋に3歳になった小林さんにはあまり記憶がない。『私たちが戦争を生で体験した最後の世代。その悲惨さを語り継ぐとともに、中国の人たちとの交流を次世代に引き継ぐことができれば』と話していた。

12．2019年の龍爪開拓団訪問

この項は次回5月15日号へ続く

次回の新聞発送作業は
3月31日（金）午前10時半から
民主会館2階で行います。
前回お手伝いくださった方です。

田吹　井内
池貝　河竹